

保育におけるドキュメンテーション活用に関する一考察 —活用に伴う課題に焦点を当てて—

前田 和代^{†1}_a 浅井 拓久也^{†2}
(令和元年11月28日受理日)

A study on the utilization of documentation in childcare: Focusing on some issues on the utilization

Maeda, Kazuyo^{†1} Asai, Takuya^{†2}
(Accepted for publication 28 th, November 2019)

要約

本研究の目的は、保育におけるドキュメンテーション活用に伴う課題を保育士への面接調査を通して明らかにすることである。本研究では保育士に半構造化面接を実施し、その過程で得たデータをKH Coderを用いて分析した。その結果、ドキュメンテーションの課題は、ドキュメンテーションの活用方法に即して、どのように活用しているかによって異なることがわかった。例えば、ドキュメンテーションは主に保護者に保育を伝えるものという活用方法の場合、保育のどの場面を取り上げるかの困難を課題として挙げていた。ドキュメンテーションの課題を解決する際は、単に課題だけを挙げるのではなく、それぞれの保育士がドキュメンテーションをどのように活用しているかを合わせて考えることでよりよい解決につながることを指摘した。

Abstract

This study clarifies issues associated with the use of documentation in childcare through interviews with childcare workers. We conducted semi-structured interviews with nursery teachers and analysed the data obtained using KH Coder. Consequently, it was found that documentation issues differ depending on how they are used per the method of using documentation. For example, in the case of an application method in which documentation mainly conveys childcare to parents, it was difficult to determine which scenes of childcare should be adopted. When solving the problem of documentation, he indicated that it would lead to a better solution by considering the problem and how each childcare teacher uses the documentation.

キーワード：ドキュメンテーションの活用、活用における課題、計量テキスト分析
Key words: Utilization of documentation, problems in utilization, quantitative text analysis

1. 問題と目的

『幼稚園教育要領解説』では、保育の質の向上のために、計画、実践、評価というサイクルの必要性が示されている。特に、保育における評価は、主に日々の保育記録を通して、自分の保育を振り返ったり、子ども理解に努めたり、それらを保育士同士で共有したりすることであり、評価は保育の質を高めるために欠かせない。

このような評価の重要性を踏まえて、『幼稚園教育要領解説』では評価の妥当性について次のように指摘されている。例えば、「日々の記録やエピソード、写真など幼児の評価の参考となる情報を生かしながら評価を行ったり、複数の教職員で、それぞれの判断の根拠となっている考え方を突き合せながら同じ幼児の良さを捉えたりした、より多面的に幼児を捉える工夫をする」¹⁾、「評価を一人で行うことが難しい場合も少なくない。そのような場合には、他の教師などに保育や記録を見てもらい、それに基づいて話し合

うことによって、自分一人では気付かなかった幼児の姿や自分の保育の課題などを振り返り、多角的に評価していくことも必要である」というように、評価はすればよいのではなく、その妥当性も重要であることが指摘されている²⁾ (引用中の傍線部は筆者による)。

こうした評価の妥当性を担保するための具体的な方法として昨今注目されているのが、ドキュメンテーションである。ドキュメンテーションとは、「保育士の観察メモ、記録テープ、写真、ビデオなどを用いて、保育のプロセスが見えるように作成した記録文書」³⁾を指す。ドキュメンテーションによって、「遊びの場合、子どもたちが何を楽しんでいるのか、どのような経緯があつてこの作品を作っているのかということが見えにくいものです。ドキュメンテーションには、そういった経緯を可視化する」⁴⁾ことや、「写真を含み込んだドキュメンテーションは、ある場面が可視化されることで、具体的な子どもの姿を想起し、それぞれの読み取りや対話をより活発にする」⁵⁾こと、「写真を入れ

†1 家政学部 児童学科

†2 秋草学園短期大学 幼児教育学科

た保育の記録作りは、可視化により保育者にとって自らの保育の再確認と共に子どもの成長をより明確に確認できる⁶⁾ことが可能になるとされている。ドキュメンテーションは、写真を用いた記録であることから、保育を可視化しやすく、そのため多面的に保育を振り返ったり、多数の保育士と共有したりすることが容易になり、そのため妥当性のある保育の評価方法とされている。

こうしたドキュメンテーションの特徴を背景に、ドキュメンテーションに関する研究も様々なされてきた。

例えば、保護者との連携のツールとしての活用についての研究がある^{7) 8) 9)}。保護者との連携について、中村は、保護者が園からの情報提供を求めていたことを再確認し、保護者が保育に興味を持ち保育に参画する意欲と欲求を持っていること、保護者同士で掲示板の前で会話するというような保護者の反応についても指摘している¹⁰⁾。

また、子ども同士の連携については、利根川が、ドキュメンテーション活用について、「ドキュメンテーションを子どもの見える場所に掲示することにより、自分がやってきたことややっていることを振り返ることができる、参加していない子どもにとって、途中から参加するきっかけ、担任以外の保育者、子ども同士とクラスの枠にとらわれず、活動が共有される。」と述べている¹¹⁾。

連携の視点だけではなく、ドキュメンテーションを活用した保育の改善の視点からの研究もある。例えば、浅井はドキュメンテーションについて、観察>作成>共有>改善というサイクルを示している¹²⁾。つまり、作成して、共有するところで終わりにするのではなく、保育を見直し改善していくところまでがドキュメンテーションの活用であると指摘している。

また、小林はドキュメンテーションを活用した保育カンファレンスに関して、子どもやその行為に対する見方を広げ、深めていくための題材になるという¹³⁾。そして、保育の中で見えていなかった子どもへの気づきや、客観的俯瞰的な視点への気づき、多様な視点からの読み取りの広がりなど保育者の変容を効果として挙げている¹⁴⁾。

この他にも、子ども理解や保育計画に繋がるドキュメンテーションの活用に関する研究などがある^{15) 16)}。

このように、ドキュメンテーションの活用が保育にもたらす効果（よさ、メリット）に関する研究は様々あるが、ドキュメンテーションを保育で活用する際の課題について実証的な調査に基づいて指摘した研究は限定的であった。例えば、植草は、「ドキュメンテーション作成への負担」というような保育士の業務を課題としてあげている¹⁷⁾が、具体的にドキュメンテーションをどのように活用する際に、何が負担としてでてくるのかを実際にドキュメンテーションを作成する保育者を対象に実証的に調査して結論を導いたものではなかった。

そこで、本研究では、ドキュメンテーションを保育に活

用する際に伴う課題について、ドキュメンテーションを活用している当事者である保育士の言葉を分析することで明らかにする。特に、保育士がどのようにドキュメンテーションを活用しているか、その活用に伴う課題は何かを明らかにする。なぜならば、どのような活用をし、どのような活用をする際に生じる課題かを明らかにすることで、課題の解決策も具体的なものになり、保育の実践に反映しやすくなるからである。どのような活用をしているのかと共に、ドキュメンテーションの課題を明らかにして、その課題に対してどのような解決策が考えられるかを検討することで、保育でのドキュメンテーション活用がいっそう効果的になるものと思われる。

2. 方法

(1) 調査対象と調査方法

ドキュメンテーションの実践的な課題について明らかにするために、保育にドキュメンテーションを取り入れている保育所に勤務する保育士3名を対象とした半構造化面接を実施した。同園でのドキュメンテーションの取り組み方は次の通りである。これまでの保育記録は、文字を中心としたエピソード型の公開日誌として行っていたが、保育士からの提案で、5年前からドキュメンテーション型の公開日誌に変更した。午前中に担任保育士が保育の写真を撮り、午睡中にパソコンに写真のデータを取り入れ、ドキュメンテーションとして使用する写真を選択し、印刷する。その後、写真にコメントなどの文字を加えていく。ドキュメンテーションの大きさはB4サイズ1枚であり、それを各クラスの入り口の提示の棚に置き保護者が迎え時に閲覧できるようにしている。

こうしたドキュメンテーション型の記録になり、各々の保育士は活用の効果について何かしら感じているようではあったが、園としてどのような効果があったのかは特に把握しているようではなかった。このような状況である対象園の状況が本研究の目的である、活用に伴う課題と一致したため、対象園とした。

本研究で実施した面接調査では、次の3名の保育士を対象にした。保育士Aは調査対象園の主任保育士であり、保育士経験は22年（主任経験2年、当園在籍1年）であった。保育士Bは保育士Aと同様調査対象園の主任保育士であり、保育士経験26年（主任経験1年、当園在籍1年）であり、保育士Cは保育士経験7年であった。

面接調査は調査対象園内にて、2019年5月15日に一人ずつ順に行った。面接時間は一人当たり約1時間程度である。面接では、「ドキュメンテーションの活用方法」、「ドキュメンテーションの活用における課題」について質問した。調査対象の各保育士の許可を得て、面接は録音した。

(2) 分析方法

半構造化面接によって得られた回答をテキストデータ化し、KH Coder (v.3)を用いて対応分析を行った。KH Coder (v.3)を活用したのは、「いかなる言葉が回答中に多く見られたのかということを確認することができる。また、近くに布置されている言葉の組み合わせをみることで、いかなる言葉が似通った文脈で使われていたのかを読み取ることができる」¹⁸⁾ ことで、保育士間の回答の特徴を明らかにすることができると思ったからである。

KH Coder (v.3)を使用する際は、分析の精度を上げるために茶釜によって複合語を検出し、検出結果をKWICコンコーダンスで確認した。この結果、「アクティブラーニング」、「書き方」等のような複合語を強制抽出する対象とした。また、対応分析では集計単位は文、出現数による語の取捨選択での最小出現数は5、差異が顕著な語は上位50とした。その結果、「ドキュメンテーションの活用方法」に関する質問では文は60、総抽出語1011、分析に使用した語句322、「ドキュメンテーションの活用における課題」に関する質問では文は56、総抽出語1009、分析に使用した語句349となった。

(3) 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、研究対象園の園長、主任の先生方、面接対象者の保育士3名に対して、文書で本研究の目的や概要、口頭で面接内容等について説明を行った。また、本原稿について提出前に確認していただき、承諾を得た。

3. 結果と考察

(1) 「ドキュメンテーションの活用方法」

まず、「ドキュメンテーションの活用方法」の分析結果を示したのが図1である。

保育士Aの近辺には、「書く」「日誌」「記録」などの言葉が布置されている。例えば、「日誌」に該当した箇所では、「公開日誌として」「毎日の日誌」と述べており、保育士Aにとってドキュメンテーションは毎日の保育の記録、日誌であるといえる。そして、それらの言葉のまわりには、「手がかり」「アクティブラーニング」「職員」という言葉がある。例えば、「手がかり」に該当した箇所では、「子どもを知る手がかりです」「次の保育へむかう手がかり」と述べている。保育士Aにとってのドキュメンテーションの活用方法とは、「書く」「日誌」「記録」という日々の保育記録や日誌であること、そしてその保育記録に基づいて子どもや同僚の保育を知る手がかりとなることや、保護者とのコミュニケーションの手がかりになることを意味していた。

保育士Bの近辺には、「写真」「レイアウト」の言葉が布置されている。例えば、「写真」に該当する箇所には、「ド

キュメンテーションを持ち寄って話すんですけど、やっぱり写真があるからわかりやすくて」と述べている。保育士Bにとってドキュメンテーションは、写真があることによって保育がわかりやすくなる（伝えやすくなる）ということの意味していた。また、「レイアウト」の該当する箇所では、「レイアウトとか見やすさとか」などと述べていることから、レイアウト調整でより見やすい方法を検討している

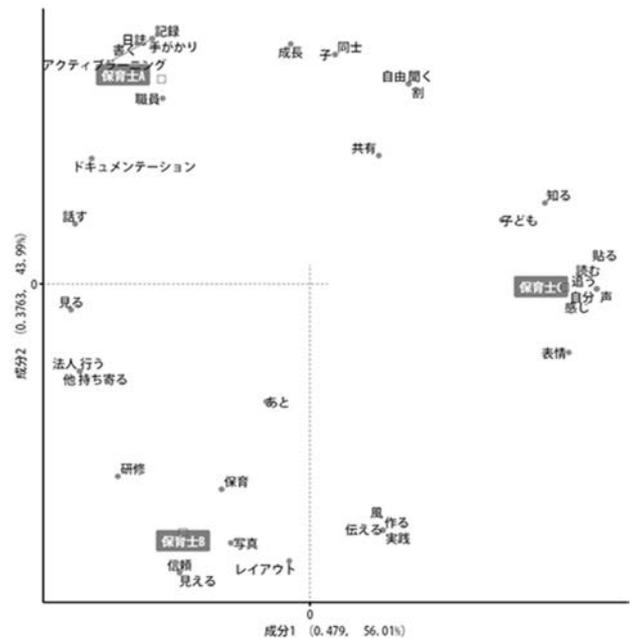


図1 「ドキュメンテーションの活用方法」の対応分析結果

ことを意味していたことがわかる。さらに、それらの言葉とともに、「信頼」「見える」の言葉がある。例えば、「信頼」や「見える」に該当する箇所では、「信頼関係につながる」「様子が見えてきますね」などと述べられている。「信頼」「見える」という言葉は、保護者に対する信頼であり、レイアウトを工夫した写真によって保育が「見える」という見解であると考えられる。これらから、「写真」「レイアウト」などを工夫することで、「信頼」に繋がっていくという捉えをしていると考えられる。

保育士Cの近辺には「読む」「追う」「自分」「感じ」の言葉が布置されている。例えば、「読む」「自分」「感じる」などに該当する箇所では、「自分で読み返すことにより自分の振り返りや子どもの成長を感じるきっかけ」「割と自由にみんなのをよく読んでいます。」と述べている。これは、保育士C自身が作成した自分のドキュメンテーション、または他の保育士のドキュメンテーションを読むことにより、保育を振り返ることや子どもの成長を感じていることを意味していた。さらに「声」という言葉がそれらの言葉の付近にある。例えば、「声」に該当する箇所では、「やっぱり声を聞いているから」「お子さんの声も知って」などと述べて

ているのか」「見通しを持ってドキュメンテーションを作成しているのか」と述べている。「～しているのか」という疑問を示す言葉であることから、ドキュメンテーションを作成する際にその後の活用や展開を見通せているかどうかという点が課題であることを意味しているように思われる。

保育士 B はさらに、作成や写真撮影について具体的に、「見通しを持ってドキュメンテーションを作成しているのか」というところですね」「見通しを持っている人の写真と行き当たりばったりの人の写真は違うから」とも述べており、ドキュメンテーションに用いる写真を撮影する際も、漠然とした状態であっても、次の保育の見通しが立っている場合とそうではない場合では写真の撮影の仕方にも違いがでてくるとのことであった。これは、なぜこの場面を取り上げたのかという保育内容の意図が他の保育士にとって理解しにくい場合があるということであろう。どのような保育を可視化していきたいのかという分かりにくさから、保育を共有していく困難さを示しているといえる。

さらに、「関係」「持つ」「同士」の言葉がそれらの言葉に布置されている。例えば、「関係」に該当する箇所では、活用方法で見たように（図 1）、「信頼関係につながっているか」と述べていることから、ドキュメンテーションを作成した後に、具体的に保護者や保育士同士で関係が築けているのかという疑問を捉えていることがわかる。

保育士 C の近辺に布置されているのは、「楽しい」「面白い」の言葉である。例えば、「楽しい」「面白い」に該当する箇所では、「作るのが楽しいです」「ありのまま、むしろおもしろいことを書ける」と述べている。これは、ドキュメンテーションを作成することがあまり負担ではなく、楽しかったり面白かったりするという意味を意味していた。

また、「書き方」「事務」「減った」という言葉も布置されており、これらも含むと保育士 C にとっては、ドキュメンテーション作成においては困りごとと捉える課題はなく、むしろドキュメンテーションを取り入れたことによって文字が中心の日誌と比べて負担が減り楽しく作成していることを意味していた。

一方、「差」という言葉もそれらの言葉の付近に布置している。例えば、「差」に該当する箇所では、「そうでない保育士もいるから、差が気になります」「何を書いたらいいかわからなくて時間がかかる人もいます。今日書くことな一と困っている人もいます」などと述べている。これは保育士 C にとっては、ドキュメンテーション作成は楽しい作業であるが、そうでない保育士がいること、作成に負担がある保育士がいることを指しており、作業時間や内容についての「差」を意味している。この点は、園全体として捉えると、これらの保育士個人による「差」は課題と言えるだろう。

以上の結果から、ドキュメンテーションの活用に関する課題についても、保育士間による課題の捉え方に相違があ

った。保育士 A と保育士 B は、ドキュメンテーションの活用方法を記録として、あるいは保護者等とのコミュニケーションツールとして捉えていたことから、課題についてもこれと対応したものであった。つまり、保育内容の確認や保護者に対して保育が伝わっているかどうかという課題である。また、保育士 C は、ドキュメンテーションの活用方法ではドキュメンテーションから子どもの声を拾ったり、自分の保育の振り返えたりすることに重心があったことから、自分のやり方と各保育士のやり方（書き方）についての違いについて触れている。保育士 C の分析からは、園全体でドキュメンテーションを活用方法について共通理解、共通認識を形成していくことが課題として挙げられていることがわかった。

4. 総合考察

本研究では、保育士それぞれのドキュメンテーションを活用方法と、それに伴う課題について分析を行ってきた。これまでの研究でなされていたドキュメンテーションの課題という大きな括り方ではなく、どのような活用方法にどのような課題があるのかを明らかにすることで、具体的な課題解決策につながりうるからである。以上の分析結果と考察を踏まえると、次の 2 つが示唆される。

(1) ドキュメンテーション活用に伴う課題

ドキュメンテーションに対する保育士の認識は必ずしも同じではなく、保育士それぞれのドキュメンテーションの活用方法に伴う課題に対応していくことの必要性である。

保育士 A はドキュメンテーションの活用方法について、保育を残していく記録として、またドキュメンテーションを通した同僚や保護者との保育の共有に重心があった。このため、ドキュメンテーションの課題として、保育の内容がきちんと確認できるかどうか（主任である保育士 A が知ることができるかどうか）、あるいは園全体で保育を振り返り、評価し、改善点を明らかにして次の保育につなげていくことができるかどうかを課題として提示していた。

こうした課題に対しては、そもそも主任である保育士 A が、どのようなドキュメンテーションなら保育の内容が伝わるのかを同僚保育士に発信していくことが欠かせないであろう。保育士それぞれが作成したドキュメンテーションに対する助言だけではなく、園全体でドキュメンテーションをどのように作成・活用することが、わかりやすいものになるかという合意を形成する機会を設ける等していくことが必要になるであろう。

保育士 B は、ドキュメンテーションの活用方法について、保護者が保育を読み取りやすくなることに重心があった。それゆえに、ドキュメンテーションの課題として、保護者が読むことを前提に見通しをもった保育とその可視化の大

変さを指摘していた。別の言い方をすると、保護者が読むという意識が強く、ドキュメンテーションを作ることに意識が向いているということが課題になっていた。

確かに、先行研究が指摘するように、ドキュメンテーションには保護者に保育を伝える、またそれによって保育士と保護者が信頼関係を構築するきっかけにするという側面がある。しかし、ドキュメンテーションは作ることにそのものに要点はなく、それ以上にドキュメンテーションから次の保育を創造したり、ドキュメンテーションによって保育を振り返ることが重要である。なぜなら、それが保育の質向上につながっていくからである¹⁹⁾。

そこで、こうした課題に対しては、園内研修でドキュメンテーションを持ち寄りカンファレンスを行ったり、ドキュメンテーションを使って自分の保育を発表したりすることで、保護者のために作ることが目的のドキュメンテーションから、自身の保育を振り返るために使うことが目的のドキュメンテーションへと変化していくようにすることが重要になると思われる。

保育士Cのドキュメンテーションの活用方法は、保育士Bとは反対に、ドキュメンテーションを活用して保育を振り返ったり、ドキュメンテーションの読み取りを通して子ども理解を深めることであった。こうした活用方法に伴う課題として、保育士Cの立場からすればドキュメンテーションの作成やそれに伴う保育の振り返りは楽しい行為であり課題はみられなかった。しかし、園全体で見た場合に、ドキュメンテーションを楽しめる保育士とそうではない保育士がいる場合には、ドキュメンテーションを通じた保育を基軸とした全体の保育の実現が困難になることがあると思われる。

そこで、こうした課題に対しては、保育士Cの取り組み（そこに含まれるコツや喜び）を園全体で共有し、園全体でドキュメンテーションを通じた振り返りや子ども理解の深化につなげるように方向づけていくことが重要であろう。津守は保育の振り返りは本来的には楽しい行為であると指摘しているが²⁰⁾、ドキュメンテーションを活用することでこうした楽しさが促されるのであれば、それを園全体で共有していくことは、園全体で保育の質向上につながっていくことになる。もちろん、保育の振り返り方法は保育士それぞれで異なることから、ドキュメンテーションの使い方を当為論として課すものではないことは言うまでもないであろう。

このように、保育士間でドキュメンテーションの効果や課題の捉え方に相違があった。それぞれの保育士がドキュメンテーションを活用する際にどこに重心を置いているかという活用方法とあわせて考えることで、課題がより明確に見えて、その解決策も多様に考えることができるようになると思われる。

(2) ドキュメンテーション活用のあり方

ここでは、ドキュメンテーションの活用方法のあり方について検討していく。保育士Cの言葉に多く見られた「声」は子どもの声をよく聞くようになったということであった。また、「目線」という言葉もあり、子ども側に立って考えるようになったとのことであった。これは、子ども理解への深まりと言えよう。子どもの思いを知ろうとすること、「声」をよく聞いて、その「声」から保育を展開していったり、環境構成を考えたりしていくことに繋がっていくことである。保育士Cの言葉からは、次の保育へどうつながるかについては語られていなかったが、ドキュメンテーションがその「声」を捉えるツールとなり、保育士C自身の保育実践につなげている意識があることが読み取れた。

ドキュメンテーションは日々の保育実践をつなげていくツールであるが、保育士Aが捉えている子ども理解につながる活用方法は園全体としての共通理解ができておらず、一人一人の保育士の質の向上へのつながりへの実感が持てないことがドキュメンテーションを活用する際の課題として残っている。これは、ドキュメンテーションがあくまでも各々の保育士個人の作成、記録となっており、自己完結的な部分もあるからである。保護者や他の保育士にドキュメンテーションの掲示から保育の可視化としても、保育士のそこでの意図や保育の捉え直しや振り返りまでを共有していく意味での可視化の困難さを示しているといえる。

以上から、ドキュメンテーションが子どもの気づきやどのような保育を展開していたのかという保育内容を共有できていることは示された。しかし、気づきや保育内容の捉え方の相違から、一人一人の保育士の質の向上にはつながりにくいという現状が見えてきた。可視化されている部分がいわゆる「何をした」という具体的な保育内容でとどまっており、保育士自身の成長感や納得感につながっていない。保育を可視化するのは、保育をわかりやすくするだけではなく、あるいはそれ以上に保育の振り返り、評価のためであるとするれば、ドキュメンテーションが保育のよりよい展開につながるような活用になっていない可能性が示唆されている。

また、レイアウトなどより見やすい方法を検討することも、ドキュメンテーションの見やすさに重きが置かれてしまい、保育の限られた時間の中でドキュメンテーションを通して対話を行うという活用になっていないものと思われる。

つまり、ドキュメンテーションの活用と保育士としての成長や自分の保育の点検という認識をもち、それに基づいてドキュメンテーションの活用がなされていないと、相違は解消されず、保育内容、実践の共有、さらには、保育士の質の向上も困難になってしまうであろう。ドキュメンテーションの活用と保育士自身の成長感、納得感のつながり

をどのように構築していくかということが課題であることが示唆された。

(3) 本研究の今後の課題

今後の課題として、本研究では、3名の保育士の半構造化面談によるデータに基づいた結果であった。今後、より多くの保育士、また様々な立場の保育士を調査対象とすることで、より具体的なドキュメンテーション活用の効果や課題が見えてくるであろう。こうした調査の精緻化によって、ドキュメンテーションの効果がいっそう高まり、課題の克服の契機を得ることにつながると思われる。

特に、保育士Cはドキュメンテーションを活用することで、保育を楽しんでいた。保育士Cとドキュメンテーションの関わり、保育士Cによるドキュメンテーションから保育への展開をよりきめ細やかに分析していくことで、ドキュメンテーションを活用したよりよい保育の実現を考える契機となろう。

引用文献

- 1) 文部科学省(2017)『幼稚園教育要領解説』、p.123
- 2) 前掲 p.104
- 3) 白石俊江(2018)『スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活用 - 子どもから出発する保育実践』、新評論
- 4) 請川滋大・高橋健介・相馬靖明・利根川彰博・中村章悟・小林明代(2016)『保育におけるドキュメンテーションの活用』、ななみ書房、p.9
- 5) 前掲4) p.10
- 6) 保育総合研究会(2013)『保育サポートブック 5歳児クラスのエデュケーション計画から保育ドキュメンテーションまで』、世界文化社、p.5
- 7) 矢野理絵・北野幸子・矢藤誠慈郎・永田久史・鬼塚和典・椋沢幸苗・坂崎隆浩(2015)「保育ドキュメンテーションを媒体とした保育所保育と家庭との連携・協働に関する研究」、保育科学研究(6)、pp.64-77
- 8) 鬼塚和典・北野幸子・矢藤誠慈郎・永田久史・田中啓・椋沢幸苗・坂崎隆浩(2016)「保育ドキュメンテーションを媒体とした保育所保育と家庭の子育てと連携・協働に関する研究」、保育科学研究(7)、pp.38-50
- 9) 砂川幸(2018)「保育ドキュメンテーションの導入から保護者支援、連携の在り方を模索する」、保育実践研究・報告集(12)、pp.36-41、
- 10) 前掲4) p.36
- 11) 前掲4) p.16
- 12) 浅井拓久也(2019)『活動の見える化で保育力アップ!ドキュメンテーションの作り方&活用術』、明治図書、p.22
- 13) 前掲4) pp.44
- 14) 前掲4) pp.50~54

- 15) 植草一世(2018)「子どもに寄り添う保育を行うためのドキュメンテーション - つぶやきを拾うエピソード記録からの考察」、植草学園短期大学紀要(19)、pp.51-57
- 16) 高橋洋行・浅井広・児嶋雅典(2018)「保育におけるカリキュラム・マネジメントの理念と実践について - ドキュメンテーションを用いた子どもの遊びや生活を理解することを通して」、松山東雲短期大学研究論集(49)、pp.32-40
- 17) 前掲 15
- 18) 樋口耕一(2004)「テキスト型データの計量的分析 - 2つのアプローチの峻別と統合」、理論と方法19(1)、pp.101-115
- 19) 前掲3) p.17
- 20) 津守真(1980)『保育の体験と思索 - 子どもの世界の探求』、大日本図書、pp.9-10

謝辞

お忙しい中、本研究における面談に快くお受けくださった園の皆様は心より感謝申し上げます。